

〈情況〉とサブカルチャー
—— 雑誌『試行』をめぐる文化論的考察 ——

山 崎 隆 広

“Situation” and Subculture—The Cultural Analysis for *Shiko (Trial)* Magazine

Takahiro YAMAZAKI

群馬県立女子大学紀要 第38号 別刷

2017年2月

Reprinted from

BULLETIN OF GUNMA PREFECTURAL WOMEN'S UNIVERSITY No. 38

FEBRUARY 2017

JAPAN

〈情況〉とサブカルチャー

—— 雑誌『試行』をめぐる文化論的考察 ——

山 崎 隆 広

“Situation” and Subculture—The Cultural Analysis for *Shiko (Trial)* Magazine

Takahiro YAMAZAKI

キーワード：サブカルチャー、同人誌、大衆化

本稿では、1961（昭和36）年9月に創刊され、1997（平成9）年12月発行の第74号でその三十余年の幕を閉じた同人誌『試行』を取り上げる。吉本隆明、谷川雁、村上一郎という3人の批評家、詩人、編集者達を中心に立ち上げられた『試行』は、1960年代のはじめから21世紀の目前までという長きにわたって続いた、同人誌としては異例の長寿雑誌であった。掲載原稿は読者からの無償の直接投稿によって構成され、流通は一般の小売店での販売を極力絞って、直接購読制を原則とする姿勢を最後まで貫いた。同人出版という形にこだわりながら、編集部（吉本）は雑誌だけでなく書籍の出版にも手を広げていった。

われわれがこれまでに見てきた『ニューミュージック・マガジン』や『ロッキング・オン』などの雑誌は、『試行』創刊からおよそ10年後の1960年代末から1970年代はじめにかけて創刊された音楽専門誌である。両誌とも、特に創刊から10年ほどの間は、時に難解な用語や言葉遣いが誌面に並び、若者向けのサブカルチャー誌としては世界的にも独特なスタイルをもったメディアであった。1980年代半ば以降、『試行』最初期からの同人である吉本が、その批評対象をマンガやロックミュージックなどのサブカルチャー領域へと広げていったことはよく知られているが、『ニューミュージック・マガジン』や『ロッキング・オン』がより広範な読者を獲得していく1980年代以降、吉本はサブカルチャーの世界にますます召喚されるようになっていった¹。

ここで、われわれは以下のような仮説を立てる。日本のサブカルチャー、特に雑誌メディアの場のはじまりには、戦後の同人批評誌のスタイルが色濃い影響を及ぼしていたのではないか。ある時期の同人批評誌の先鋭性が、日本のサブカルチャーの進路を方向付けたのではないか。また、次第に先鋭性を失っていくサブカルチャーの場を補完するかのごとく、同人批評誌のオルタナティブ性が召喚されたのではないか。そして、もっと直截に言えば、1960年代のはじめ、マスメディアとは一線を画す姿勢を宣言して吉本達によって立ち上げられた言語、文学、芸術、思想、政治を論じる同人批評誌『試行』のスタイルは、日本独特のサブカルチャーの雛型を形成するのに大きく寄与したのではないか——、と。

これらの動きを検討していくことを本論の主な目的とする。なお今回特に言及するのは、1960年代初期の『試行』、すなわち『ニューミュージック・マガジン』創刊前の同誌についてである。

1. サブカルチャーの中の〈情況〉

まず、ひとつの「論争」について確認しておこう。『新宿プレイマップ』（1969年7月創刊。以下『プレイマップ』）と『ニューミュージック・マガジン』（1969年4月創刊。以下『NMM』）という2つのサブカルチャー誌を横断するようにして展開されたいわゆる「日本語ロック論争」は、日本

のポピュラー音楽をめぐる〈情況〉について具体的な方向性を示すことはないまま、いつしか収束していった。1960年代最後の年、ほぼ同時期に創刊された両誌で繰り広げられたこの「論争」の内容が正確に振り返られることはないままとなつてはほとんど無きに等しいが、それでもなお、1970年代はじめのこのつかの間の「論争」が、これまでも日本のポピュラー音楽史を検証する際の重要な出来事として度々参照されてきたのは何故なのだろうか。

そもそも『プレイマップ』1970年10月号「喧論戦シリーズ②『ニューロック』」と、『NMM』1971年5月号特集の「日本のロック情況はどこまで来たか」において知られることになったこの「論争」の背景には、これからのミュージシャンはレコード会社が用意した楽曲ではなく、自分達の生きる姿勢やメッセージを自作、自演するべきだとする（「シンガーソングライター」であるべきだという）1960年代後期の欧米ポピュラー音楽シーンに現れた「ニューロック／アートロック」の新たな〈情況〉があった。そういった新しい〈情況〉下、相も変わらず旧来型のティンパンアレー方式にたよってヒット曲を量産しようとする日本のレコード会社、芸能事務所への苛立ちを隠さない内田裕也一派と、日本語詞で曲を作り、演奏し、歌うことをいとわない大滝詠一らはっぴいえんど側が対立する²。内田らの主張は、ロックとは欧米からの外来カルチャーなのだから本来的に英語で歌われるべきで、それは時代遅れの商業主義的なシステムにこだわる日本の音楽業界からの脱出を意味し、そして欧米の自由なニューロック／アートロックへと日本の音楽を解放して、彼らと同じ土俵で闘うことになる、といったものだ。それに対して大滝らの主張は、日本語で生活する自分たちがロックを日本語で歌うことはごく自然なことであり、それはロックを日本に「土着化」させようとする試みでもあるのだというものだった。この主張の応酬は、ロックという外来の音楽に対する原理主義的姿勢とリベラルな姿勢の対立の構図として、ひとまずは理解されてきた。

しかし、その理解は半分は正しいが、決してじゅうぶんではない。上記の問いに立ち返れば、結論らしきものも示さずに終わった一連の議論が、いまなお日本のポピュラー音楽史における事件として価値をもつのは、この「論争」がロックという音楽の〈本質〉とは何かをめぐるて交わされた初めての諍いであったからである。この「論争」は音楽の内容を云々すること以前に、ロックという外来の〈他者〉の存在規定をめぐる文化論的見地からの問いであった。必ずしもかみあうことのなかったこの「論争」の最大の意義は、ロックミュージックという外来文化と日本語という言語の伝統についての審美的、技術的、原理的な優劣の決着がついたかどうかなどということではなく、むしろロックという〈他者〉をいかに日本で受容するか、いかにそれと向き合っていくかという文化論的、〈本質的〉な問いが、1970年代のはじめの時期に提出されたという事実にある³。それから半世紀近くを経た今もなお、われわれはここで提起された問いに対する回答を見出してはいない。と言うよりも、「問い」そのものの存在を忘れ去ってしまった。ただ、ひとつ確かなのは、ポピュラー音楽の〈本質〉をめぐる議論が存在する場所が、かつての日本のサブカルチャー誌上にあったということなのである。

1970年代のはじめの「日本語ロック論争」は、ロックという音楽を、——肯定的評価であるにせよ否定的評価であるにせよ——〈他者〉として、つまり違和をおぼえる存在として捉える感覚がまだあったということをわれわれに教える。ロックという外来文化の〈本質〉を問おうという要請が、当時の若者文化の中にあつたということを示唆する。『NMM』創刊前から、音楽のルーツに意識的であろうとすることを信条としてきた中村とうようにとって⁴、日本人がロックという新しい音楽にいかに向き合うべきかを論じるのは避けて通れないことだった。むしろ、それこそが中村が『NMM』を創刊した理由であると言っていい。様々な黒人音楽に傾倒していた中村にとって、ロックとは黒人のブルースをリズム&ブルースとして昇華させ、それまで限られたオーディエンス内に秘匿されていた黒人音楽におけるタブー性（性や快楽など）をより大衆的に解放した音楽なの

だから、リスナーを限定してしまうローカルな言葉より、感覚的なサウンド、ビートの方がまずは大事なのだと考えるのは自然なことである。われわれにとっては本来的に〈他者〉であるはずのロックのビートが、いかにそのルーツを保ちながら、この国に受容されていくか。そのことに無自覚なのは中村にとっては許しがたいことであつたはずである。だから中村には、ルーツ言語たる英語でロックを歌うことにさして執着をもたないはっぴいえんどのようなバンドは、評価しながらも一方でどこか煮え切らない、すんなりと受け入れることが難しい存在であつたに違いない⁵。

そういった意味では、明らかに中村はロックを英語で歌うことにこだわる「内田裕也派」だつたのだが、その中村が編集長を務める『NMM』が、日本語フォークの「神様」岡林信康に続いて、日本語でロックを歌うはっぴいえんどのアルバムに1970年の最優秀アルバム賞を与えたことで、議論は感情的側面からももつれていくことになつたのだつた⁶。

いずれにしても、ロックのルーツをめぐる文化論的問題、ロックと言葉（日本語と英語）の関係をめぐる審美的問題、そしてロックを日本のものとしていかに「土着」させるかという問題は、どれもロックという音楽の〈本質〉をめぐる問いであつた。特集記事のタイトルにも使われた「情況」という用語を見ても、われわれは当時の『NMM』や『プレイマップ』のようなサブカルチャーの場が、より硬質な政治や〈運動〉を語る場と近接する状態にあつたであろうことを容易に推察しうる。当時を知る者からすれば、情況や土着といったタームは日常のクリシェのごとく使われていた用語だろうが、そもそもそれらが時代を読み解くキーワードであるかのように登場していたのは、サブカルチャーとは一見縁遠い政治機関誌、言論誌、総合誌などの場所であつた。であるならば、政治や思想がサブカルチャーに接続される回路が、この時代には存在したということだろうか。〈本質〉をめぐる「論争」することが価値あることとされ、政治とサブカルチャーが渾然とする場が、この時には存在したということなのだろうか。果たしてそれはいつ始まり、いつ終わったのか。

ここでわれわれは、発行部数の規模や流通チャンネルの違いこそあれ、雑誌の判型や装丁、価格などといった外的要素、そして〈本質〉をめぐる「論争」を好むスタイルや雑誌発行者が誌上の名物連載コラムとして時事問題を論じていくといった主に雑誌編集にまつわる内的要素の両面において、『NMM』は、1961年に創刊・発行された同人誌『試行』のスタイルの嫡流にあたるのではないかという考えに思い至る⁷。硬質な言論の場が、いつしか若者向けの雑誌文化の場にある種無防備に接続されていく様子を感じ取る。『試行』のような少部数の同人誌が、若者向けのサブカルチャー誌のスタイルに影響を及ぼすまでになっていた背景には、いったいどのような〈情況〉があつたのだろうか。

2. 『試行』創刊をめぐる〈情況〉

1961（昭和36）年9月、詩人であり批評家の吉本隆明、詩人にして労働運動のオルガナイザーでもあつた谷川雁、そして作家であり編集者でもある村上一郎の3名の同人を中心に、『試行』は創刊された。思想も来歴も必ずしも一致するわけではないこの3人が戦後の思想、表現、運動において果たした活動の詳細について論じることは本稿の手にあまるので省略するが、あえて共通項を挙げるとするなら、それぞれが皆1960年の安保闘争によって「あぶれた」存在であつたということだつた⁸。言い換えるなら、それは、彼らが当時のブント（共産主義者同盟）全学連主流派に近接し、逆に共産党主流派の勢力とは対立関係にあつて、闘争に「敗北」した側にいたということである。

まず1923（大正12）年熊本県に生まれた谷川雁は、1958年九州全域と山口県を結ぶ文化サークル

交流誌『サークル村』を創刊し、前衛党すなわち共産党を通じての指導よりも筑豊の炭坑労働者達の運動を直接組織することを優先して三池闘争をたたかった詩人として知られる。「あさはこわれやすいがらすだから／東京へゆくな ふるさとを創れ」と謳った詩でも知られるように、1960年の安保闘争の年には表向きには詩作を放棄することを宣言し、都会に住むよりも郷里の熊本を拠点にして労働者達と行動をともし、高度成長によって失われていく「原郷」を維持、再建することを訴えた生粋の「工作者（オルガナイザー）」であった。戦後間もない1947年に共産党に入党するも、1960年6月の安保闘争を機に共産党を脱党、翌月には除名されていた。

また、1924年東京市京橋区に生まれた吉本隆明も、出世作『高村光太郎』（1957年発表）、『転向論』（1958年発表）などの評論によって既に広く知られる存在であったが、1955年の六全協によって穏健化した日本共産党に反発する共産党反主流派の若者達を中心に1958年結成されたブントの運動に随伴する立場を鮮明にし、学生達からの支持と共産党からの批判を受ける詩人、批評家であった⁹。谷川と並んで当時の言論界のカリスマ的存在であったと言っていい。戦中からのプロレタリア文学及びその周辺の作家達を批判することにエネルギーを注いできた吉本と、旧来的な前衛を乗り越えようとする新左翼の若者達の動きは、各論において時折の齟齬を生じながらも、必然的に共鳴する。そして、1960年6月の安保闘争終結直後、吉本は「擬制の終焉」を発表、ブントの若者達の暴力性を擁護する一方で、徹底的に闘うことをしなかった共産党およびそのシンパたる「進歩的知識人」達を厳しく糾弾して、多くの共感を集めていたのだった。

吉本自身の述懐によれば、安保闘争に際して彼がとった行動は、当時の日本共産党の文化政策の延長線上にある出版の環境およびそこを主体とする文化出版界、そしてそこに拠り所を求める物書きの世界から外れることを意味していた。それは、当時の「進歩的文化人」の世界から分離して孤立することと同義であった。「僕はこの闘争が終わった時に、自分は物書きの世界から、特に理念的な世界からは孤立するだろう、それは自明のことだと考えていました。それで終わってみたら、おおよそそのようになった。これは学生さんにはわからない世界なんですよ。でも、中にいれればすぐにわかります」（吉本他 2000：9）。

この吉本の認識が正しいとすれば、全学連主流派をはじめとする当時の新左翼系の若者達にとっては自明ではなかった日本共産党を中心とする文化ヘゲモニーが、特に当時の出版の場、「知識人」の場には揺るぎなく存在していたということである。吉本にとって、1960年の安保闘争とは、アメリカ従属か否かの選択の是非などということよりも——吉本は改定安保法案の内容そのものについては必ずしも否定していない——、日本共産党主流派内に支配的なプロレタリア的価値観や「進歩的知識人」の意味を問い直すことの方が重要だった。その点において、桂秀実の喩えに従うなら、1960年の安保闘争とは日本におけるドレフュス事件であった。つまり、吉本にとっては、知識人のあり方を問う思想闘争であったのである。

例えば宮本百合子、中野重治、蔵原惟人ら旧プロレタリア文学系に属する文学者9名の発起で1945年12月に創設された日共国際派系の新日本文学会によって1946年3月発刊された『新日本文学』などの同人誌にしても、あるいは平野謙、本多秋五、荒正人、佐々木甚一、埴谷雄高、小田切秀雄、山室静を同人として戦後まもなくの1946年1月に創刊され、吉本が比較的好意的に接してきた『近代文学』にしても、当時の「物書き」の場において「進歩的文化人」とはまず「共産党系知識人」のことであり、論壇、文壇の場のヘゲモニーはいまだ彼らのうちにあった。そこからの離反は作家、知識人としての地位から滑り落ちるか否かに関わる大きな問題だったのである。

そして、3名の同人の中では最も年長である村上一郎は、1920年東京に生まれた。彼もまた、作家、評論家、編集者として既に著名な存在であったが、かつては中野重治に心酔し、1947年には共産党に入党しながらも、1959年、『試行』創刊の2年前には思想上の食い違いから共産党を脱党し、

紀伊國屋書店出版部の編集顧問、嘱託の仕事や、大学や専門学校で講師を務めつつ、文筆活動を行っていた。3人とも年代的には「戦中派」に属する世代として、価値観を決定的に共有しているとも見ることが可能なのだが¹⁰、ふたたび吉本の言によれば、毛沢東主義者、農本主義者であり、炭坑労働者のいわば落伍者を組織することに力を注いでいたアジア主義者の詩人・谷川雁と、二・二六事件を肯定し、元学徒軍人として無条件降伏を受け入れることに納得出来ず、周囲からは決起すると思われていた海軍将校群の一人でありながら、文学的には久保栄の社会主義リアリズムの系譜を継ぐという変転を経てきた村上一郎と、そして自ら度々喧伝するように激烈な元皇国少年であったという吉本隆明と、かつての日本浪漫派からの影響や共産党主流派に対する徹底的な反発心という共通項は指摘出来るにせよ、やはり思想的には微妙に異なる立場の者達の集まりであった。それでもなお、1960年安保闘争を境に「孤立」した者同士一緒にやろうということで、吉本がほかの二人に声をかけたのが『試行』創刊のきっかけだったのだという（吉本他 2000：11）。

雑誌『試行』は、判型はA5判（後の『NMM』と同じ）、頁数は78頁、定価は150円、1年分の購読料概算は郵便料込みで千円という仕様で創刊された。価格は別として、その仕様は終刊まで変わらなかった。創刊号冒頭には、「試行のために」と題された3人連名の巻頭言が1961年8月の日付入りで掲載されている。

のぼせっきりの阿Qと、しっぽを垂れた阿Qとにかこまれてこの雑誌を作る。／資本の物神化が極限までおしすすめられる時期、したがって物神的観念がいわばみえない工作機械として生産機構の中枢に意識的におかれる時期——そのときには何が起るか。／（中略）／言葉もなく立ち、言葉もなく戦わざるをえない過渡期の力学を追求するために、この雑誌は生まれた。われわれ——それはだれとだれのことであって、だれとだれのことでないのか。紛乱はまずそこから始まりうるが、雑誌の目的に照らすとき、一人称複数の確定はさしあたって必要でないというのが、われわれの見解である。

「のぼせっきりの阿Qと、しっぽを垂れた阿Q」が谷川や村上、吉本といった具体的な人物を指すのか、あるいは安保闘争終了直後の高揚と失意が相半ばする状態の新左翼学生達全般を指すのか、それは分からないが、詩人、散文家である3人の、とりわけ「連帯を求めて孤立を怖れず」という言葉を残した谷川雁の詩人の個性が強くにじむ檄文である¹¹。創刊号でこの巻頭言のほかに掲載されたのは、吉本隆明「言語にとって美とは何か」、池上徳三「『宣言一つ』その後」、南成四「清水幾太郎論」、桶谷秀昭「ドストイェフスキ論」、村上一郎「創作・炎」という合計5本の論文と散文であった¹²。

「言語美」の序論において、吉本はポール・ヴァレリーの「理論はいずれもただ一人のための理論なのである。一人の道具なのである。彼のために、彼にあわせて、彼によって作られた道具なのである」（堀口大学訳『文学論』）という文章を引いて、さらにこう書く。重要なことは、「政治的に自由でなくとも、また現実的に苦しめられていても、文学の表現の内部では自由だということがありうること。そして、この表現内部での自由は、恣意的でありうる社会のなかでの〈仮象〉であること。それゆえ、社会の外で、いかえれば文学表現の内部では、どのような政治的価値も、現実的な努力もかんがえられないこと。そして一般に、わたしたちは、二つ以上の至上なものをじぶんの意識のなかで同時にもつことはできないこと、などだ」¹³。

閉じられた場において、人はひととき価値決定を宙吊りにし、判断留保の自由を得る。吉本はこのような考え方を「個体の理論」と名付ける。「人が頭のなかになにをえがこうと、たれにもおしとどめることはでき」ず、そこでは普遍を強要されることもない。「どんな巨匠の体験をもってし

でも、どんな政治的な強制をもってしても、文学の理論として一般化することがゆるぎされない」個体の理論構築の契機を、吉本は『試行』の場に求めた。安保闘争の挫折によっていったん文壇、論壇の場のヘゲモニーを失ったと自覚した吉本にとって、「出版世界がどういうふうに変っていかうとも、それに影響を受けないで、最初に言うべきこと、言いたいことを書ける拠点を設けることがどうしても必要だ」だったのである（吉本他 2000：10）。

それでは、「進歩的知識人」が支配する文壇、論壇の場の価値体系から一步離れたところに新しい雑誌メディアを作り、勝利していく為に必要なコンセプトとは何か。吉本達にとって、それは党派的、政治的な駆け引きとは離れたところに成立する〈本質〉を、自ら立ち上げたメディアで追求していくことであった。それは、時事、政治についての直截的な言及ではなく、人間にとってより〈本質〉的な吉本流の言語論でなくてはならなかった¹⁴。そして、よく知られるように、『試行』創刊号から連載が始まった「言語にとって美とはなにか」において吉本が提出したのが、「自己表出」と「指示表出」という概念である。

「言語美」において、吉本は、マルクスの『ドイツ・イデオロギー』の「言語は意識とその起源の時を同化する」という言葉を引く。「言語とは他人にとつても私自身にとつても存在するところの実践的な現実的な意識であり、また、意識と同じく、他人との交通の欲望及び必要から発生したものである」（吉本 2001：31）。マルクスによれば、言語とは意識であり、意識は他者との「交通」（コミュニケーション）と欲望から生まれる。マルクスが他者との交通を通じて生じるという言語、意識の発生についての吉本的な新しい解釈が、「自己表出」と「指示表出」の関係性である。

マルクスは言語、文学、芸術などのテーマをまともに取り上げることがなかったが、それ故に俗流マルクス主義者たちは上記のようなマルクスの文章を誤用して、言語実用説、道具説を導き出す論を流布してきた。しかし、言語の起源は、そもそもは社会的な単なる「交通」の手段や道具としてあったのではなく、自己内の現実的意識としての音声表出を人間的な意識の自己表出としてわれわれが行うようになって初めて生まれる。すなわち動物と人間を区別し始めるのだと、吉本はいう。他者との「交通」の為に「意味」が要請されるのではなく、われわれが「自己表出」という表現行為をすることで、「指示表出」、すなわち「使用価値」が要請される。つまり、「表現」をすることによって初めて「意味」が生まれる。

「この人間が何ごとかをいわねばならないまでになった現実の条件と、その条件にうながされて自発的に言語を表出することのあいだにある千里の距たりを、言語の自己表出（Selbstausdrückung）として想定できる。（……）人間の意識の自己表出は、そのまま自己意識への反作用であり、それはまた他の人間との人間的意識との関係づけになる」（吉本 2001：36-38）。吉本によれば、「言語は自己表出の面から、わたしたちの意識にあるつよさをもたらずから、それぞれの時代がもっている意識は言語が発生した時代からの急げきなまたゆるやかなつきかさなりそのものにほかならない。また、逆にある時代の言語は、意識の自己表出のつきかさなりをふくんで、それぞれの時代をいきてゆく。しかし指示表出としての言語は、あきらかにその時代の社会、生産体系、人間のさまざまな関係、そこからうみだされる幻想によって規定される。しいていえば、言語を表出する個々の人間の幼児から死までの個々の環境によっても決定的に影響される」（吉本 2001：53）のである。

要するに、自己表出から始まるわれわれの意識を人間が見出した時、他者との関係のネットワークが作動する。その時に要請されるのが「指示表出」、すなわち「意味」、「使用価値」の世界である。さらに、言語を使った芸術である文学において、時代のさまざまな関係要因によって自己表出は「文学体」として抽象度を高めていく一方で、他者との交通、コミュニケーションに向かう指示表出は「話体」として他者とシェアされるようになっていく。

この「言語美」の連載を通じて自己表出と指示表出という概念を提出した吉本は、俳句、短歌や

現代の詩歌、そして近現代の文学作品を論じていく。その背景には、当時『近代文学』同人の作家たちさえも目立った攻撃をせずにいた小林秀雄を「どっかで超え」る為に、「言語論から言語表現論に行く以外ないだろう」と吉本が考えたことも重要な動機として存在していた。そして、自己表出と指示表出というシンプルな概念を提出したことで、「小林秀雄がやらなかったことに、クビを突っ込んでやったなっていう」感触を吉本は得た（吉本 2012：115）。吉本にとって、それは安保闘争敗北からの失地回復であり、ひとつの勝利と言えるものだったのである。

3. 『試行』同人解散、単独編集に至るまで

安保闘争に敗北した吉本達が、日本共産党のヘゲモニーや影響によらない言論の場を打ち立てようと奮闘していた1961（昭和36）年という時代、日本経済は急速な高度成長に向かっていった。しかし出版界の高度成長は他の生活領域ほどもざましいものではなく、むしろ高度成長期のひずみ下にあった¹⁵。雑誌刊行にあたっての資金繰りは決して楽なものではなかった。『試行』創刊号の「後記」にも「こういう段階では、わたしたちをもっとも力づけるのは、直接寄稿、直接購読による支援である。このことを、普通いう意味での投稿とか購読とかいうもの以上の意味をこめていいたいとおもう」という吉本による切実な文章が寄せられている¹⁶。

創刊時、困窮する吉本を資金面から援助したのは、安保闘争の頃から知己の関係にあり、公判の際には吉本も弁護側の一人にもなったブント書記長の島成郎である¹⁷。島成郎が残した1961年6月のノートには、以下のような記述がある。「〈成果その一〉吉本隆明らの雑誌の発行の目安がついた。／金 OK、7月より5万／編集・事務 高橋／事務所 新橋／同人 吉本・谷川・高橋／発行 8月上旬／隔月刊」（……）〈成果その七〉（……）吉本の雑誌を発行する。7月一杯仕事も手伝う。谷川雁と会う。（……）」（島成郎記念文集刊行会 2002：71-72）。『試行』創刊は1961年の9月なので、資金面だけでなく実務面からも、島達元全学連主流派の人脈によって全面的に『試行』の立ち上げがサポートされていたことがわかる。

吉本自身も、『試行』創刊に際して島に資金面での助力を依頼したことを認めている。「彼ら（引用者注：島成郎や中央大学社学同の三上治達のこと）に『俺たちの雑誌をやりたいんだけど、どこかに金出すやつはいないかな』と言ったら、島君が早速、『それじゃ探してきましょうか』と言って、連れてきた人がいるんです。それは『週刊労働運動』というパンフレットの、労働運動に関する情報雑誌を出していた人でした」（吉本他 2000：12）。

島が吉本に仲介した「『週刊労働運動』という雑誌を出していた人物」とは、戦中の諜報機関、陸軍中野学校の出身者の草間孝次という人物だった¹⁸。吉本は島を通じて草間から11万円を借り、奥付には『週刊労働運動』の事務所住所を載せて、創刊号は発刊された。この創刊の経緯に対し、吉本達は対立する側から度々指弾を受けている。吉本の弁明によれば、そもそも軍国主義肯定の学生だった自分からすれば、戦中社会の表面にたくさんいたそういった人物は「ちっとも恐くない」し、「戦争中に学生運動を牽引したのは、いずれにしてもその系統の人物だから、何でもない」と思っていたのだが、「竹内芳郎たちが（引用者注：『新日本文学』誌上などで）そういうことをしきりに言うてうるさいし、雑誌が思ったよりもずっとうまくいったんで、その人にお金を返そうということにした」¹⁹。吉本が草間に頭を下げ、借りの金を返しに行った時、草間は形容し難いほどの残念そうな表情を浮かべたという。それ以降、『試行』編集発行の拠点は名実ともに『週刊労働運動』事務所から吉本の自宅となった。

『試行』は金銭面ではなんとか順調に滑り出したが、編集方針については同人3人の間で衝突が絶えなかった。最初に離脱したのは谷川雁である。1961年5月、谷川が指導していた三池炭鉱退職

者同盟の大正行動隊の同志が同じ隊員の妹を強姦、殺害するという事件が起き、谷川はそれについての対応に追われていた。吉本の回想によれば、その時期に谷川は『試行』解散を提案するが、他の二人は聞き入れず、谷川のみが脱退することになった。その後何号かは吉本と村上の二人で編集と発行を続けていたが、次第に吉本は村上とも編集方針そして会計の手続きなどをめぐって意見が合わなくなり、1964年6月発行の第11号から『試行』は吉本の単独編集という形をとることになったのだという。

「主観的経緯はそういうことなんですけれども、たぶん、客観情勢からすると、安保闘争の余韻というか、名残で何かをする状況が終わった（傍点引用者）ということだと思います。（……）それ以降、『試行』は僕が単独でやるようになったんですが、『これは同人雑誌だ』と言われても、僕の方は一向に差し支えないという感じでした。運動的なものは谷川さんから解散の話がきた時に終わった、そこが終末点だと僕は考えています」（吉本他 2000：18）。1960年安保闘争の騒乱の余韻色濃い中始められた批評誌は、同人達の脱退と、時代の変容を受けて、少しずつ雑誌を取り巻く環境とともに変わっていくことになった。上述のように、1997年の終刊後、吉本は「谷川さんから『やめよう』と言われた時が、『試行』という雑誌の表現の運動としては終わりだったと思います」（吉本他 2000：19）というが、安保闘争という政治的（運動）の敗北を直接的な契機として始められた同人誌は、同人の脱退によって表現の〈運動〉としてもひとつの転機を迎えることになったのだ。

村上一郎の日記にも、最終的な同人解散の決断を下したのは吉本だったという記述がある（村上 1972：122）。『試行』第10号刷了間近の1964年2月14日、当時紀伊國屋書店出版部に勤務していた村上のもとに吉本から電話がかかってきた。『試行』を第10号で打ち切り、同人を解散して、それぞれの同人が自立しようという提案だった。一瞬村上は動揺したが、はじめから「自立」をうたっていた同人会が、3人もたれ合って同人誌を作っていくことが土台間違っていたのだと考え直した。約2週間後の2月26日夜、仕事が終わった後に村上は吉本宅を訪ね、3人の同人の正式な解散と「自立」、吉本が連載していた「言語美」の「完璧な結実」や「情況への発言」の連載継続、同人を解散しても予約金の返却を求める人は少ないだろうし、村上も剰余金の返却は希望しないが、はじめの出資者にはお金を返却し（約5万円）、第2号の残部10冊ほどを村上がもらおう、ということなどを確認したという。

共同編集最終号となった1964年2月20日発行の第10号の「後記」に、吉本はこう記す。「文化官僚たちのあらゆる努力にもかかわらず、『試行』は、あたらしい原理による可視的な、あるいは不可視の〈運動〉体として、徐々に、確実に巨歩を印しつつある。まことに本意ではあるが、文学界や思想界の評論家たちが、群小集団とか小集団とかいうレッテルを貼ってくれているのを尻目に、すでに実体的には巨大集団として機能しつつある。たれも、『試行』を無視して文化や思想を語ることができない。わたしどもが謙虚に振舞っているにもかかわらずである。／わたしたちは、コトバで語ったことはないが、何ものも窮極的にはたのまず、しかもべつに背のびをするわけでもない、という覚悟は、いい加減の官僚主義者や挑発者のどのような介入も、煽動もゆるすものではない。多数の直接読者と間接読者の支持にささえられて、これまた本意ながら、つぶれる気づかいはない。ただ、固定化と内容の停滞を、どうしても警戒しなければならないと思う」。

1960年安保闘争の敗北からの失地回復を期して立ち上げられた『試行』は、闘争の余韻冷めやらぬ時期、3人の同人によって始動した。雑誌の初期段階は成功裡に過ぎたが、人々は当時の高度成長の狂騒とともに安保闘争の余韻など忘却の彼方に追いやっていった。そして、60年代も半ばに近づく頃、「固定化と内容の停滞」から逃れることを理由に、吉本達は次なるフェーズへと移行しようと試みる。同人3人の間にしか分かりえない感情のもつれも当然あっただろうが、好調を維持す

る雑誌の〈情況〉には、変容する時代の流れも少なからぬ影響を及ぼしていたのではないか。

4. 〈大衆化〉への応答

1964（昭和39）年6月30日発行の第11号から、『試行』は吉本の単独編集となる。同号「後記」で吉本はこう書く。「『試行』は、単独編集となったが、そのことは、吉本の個人雑誌という意味をもたない。むしろ逆であり、思想・文学の運動として第二期の目標にはいったことを意味している。あらたに『試行出版部』が創設されたのも、この目標の実現に近づきたいという企図にもとづいている」。

この時期から『試行』は、それまでの雑誌に加えて書籍出版も行うことを宣言し、拡大基調に入る。ここで吉本の言う「第二期の目標」とは何か。読者からの優れた直接寄稿によって誌面を作ること、読者の直接購読によって安定した発行を維持することというスタイルは「これ以外のどんな方法も現在運動性はない」として決して変えないとするが、出版体制を維持、拡張していく為には、さらなる売上、運転資金、資本の増加が必要となる。限定された規模の流通を志向するのならこれまで同様のやり方をすれば良いが、さらなる事業拡大を望むなら、より広範な大衆の嗜好と向き合うことが求められる。いわばこれは、戦後日本の独立系の文学、芸術、政治、思想系の同人誌が初めて直面した、乗り越えなければならない〈大衆化〉に対するジレンマだった。

ここで想起されるのは、これもよく知られる「大衆の原像」という吉本の概念である。当時、吉本が行動の根拠として前面に打ち出したのが〈大衆〉の存在であった。例えば、雑誌『日本』1966年2月号に掲載された「情況とはなにか I—知識人と大衆」において、吉本は大衆と前衛知識人の間の埋めがたい乖離についてこう述べる。

「大衆は社会の構成を生活の水準によってしかとらえず、けっしてそこを離陸しようとはしないという理由で、きわめて強固な巨大な基盤のうえにたっている。それとともに、情況に着目しようとしないうちに、現況にたいしてはきわめて現象的な存在である。もっとも強固な巨大な生活基盤と、もっとも微小な幻想のなかに存在するという矛盾が大衆のもっている本質的な存在様式である」（吉本 1966：102）。吉本によれば、自身の生活を最優先にすることによってしか社会を見ようとしないうちに〈大衆〉に対し、「知識人」の政治的な集団たる前衛は、どんな未明の後進社会にあっても高度な水準にまで到達していくという宿命を「幻想」としてもっている。それは知識人にとっては「必然的な自然過程」である。そういった状態に対してロシア革命の理論的支柱となったレーニンやトロツキーが導き出した認識は3つある。一つには大衆は自らの生活情況を無視して社会の情況そのものに向き合うことはないのだから、前衛たる知識人が外からその世界認識を大衆に注ぎ込んで啓蒙する以外にないということであり、もう一つは知識人はどんな未開の社会においても高水準の世界認識をもつ存在なのだから、国家という枠組みを超えて国際的に連合するのだということであり、さらに3つ目としては革命を完成させるためには世界の最も高度な社会においてそれを成し遂げなければならないという認識であった。

だが、吉本によれば、現在真に問題なのは、そういった全幻想領域の革命が果たして大衆の中に浸透していくだろうかということだった。ロシアやロシアを模倣した社会主義国家が直面した困難は、大衆は「自然過程」として知識人へと上昇していきだろうと仮定してしまっただけのところであった。だが、いまや知識人にとっての思想的課題は、それとは逆に大衆の存在様式の原像をたえず自己の中に繰り込んでゆくことのほかにない。〈大衆〉は、自らの生活過程の水準を離れて国家に背こうとすることはない。そして社会を構成する過程の主だったものが経済過程であるというのが世界的な共通項である以上、「生活水準としてけっしてそこからはなれない大衆の思想は、世界性という基盤をもっているのだ。これが労働者に国境がないということの本質的な意味である」と吉本

は言う（吉本 1966 : 106）。

知識人は世界共通の認識の水準に向かって知的に上昇すればするほど社会の幻想的な共同性である国家の本質にぶつかり、国家を考慮することなしに世界的な連帯を達成することが出来ないという逆説的矛盾を抱える。つまり、国家を超えていく為に、国家を考えなければならない。レーニンやトロツキーが、蜂起するロシアの大衆の姿を見て戸惑ったのは、大衆の自然過程としての知的な上昇だったものを、大衆からの目覚めの過程、啓蒙の過程と混同してしまったからである。同じように、現代の日本においても、知識人の課題とは、「啓蒙とか外部からのイデオロギーの注入とはまったく逆に、大衆の存在の原像を自らのなかに繰込むという課題にほかならない」（吉本 1966 : 106）のである。

ここにおいて、吉本の〈大衆〉に対する折り合いの付け方が理念的にも妥当化される。マスメディアとは異なる理念を掲げて始められた同人誌であっても、出版資本主義（アンダーソン）に従って活動していくことに矛盾がなくなる。啓蒙的な前衛たろうとする知識人、あるいはプロレタリアートのまま社会的に上昇していこうとするようなスタンスではなく、日々の生活や暮らしの水準の上昇を行動の規範として繰り返す、身体化していくことが規範化されていく。たとえ〈大衆〉の存在が吉本が措定した「擬制」に過ぎず、フィクショナルな「^{イメージ}原像」であったとしても、である。このように、高度成長期の度重なる物価上昇に苦しみつつも、拡大局面に入ってしまった第2期『試行』は、それまでの吉本の思想の陸続とした流れのうちに、矛盾することなく成立していった。

5. 〈大衆化〉とサブカルチャー

高度成長期、拡大していく『試行』は「試行出版部」としていよいよ書籍出版にも乗り出していく。雑誌創刊当初から連載されていた吉本の『言語にとって美とはなにか』は1965（昭和40）年5月に第一巻、10月に第二巻が書籍として刊行される。吉本以外の村上、桶谷秀昭などの連載原稿も単行本としてまとめられ、書店店頭に並ぶようになっていく。吉本がいくばくかのユーモアも交えて牽強付会に語ったように、『試行』の影響力は「実体的には巨大集団」のようになりつつあった。

また、この頃から『試行』の名物連載の一つであった吉本の「情況への発言」などにおいても、晦渋で知られる吉本の文体は少々だけ、肩の力の抜けたものになっていった。しかしその分かって、標的に対して口さがなく悪罵の限りを尽くす吉本独特の闘争的な文章の特徴が前景化されてくる。例えば1966年5月15日付の『試行』第17号「情況への発言」の原稿では、連載中初めて対話調の文体が採用され、『新日本文学』の対談で吉本の「自立の思想的拠点」を批判していた野間宏、針生一郎、武井昭夫らを返す刀で激しく罵倒している。吉本は対話調の文章の中に登場するおそらくは架空の人物の口を借りて、こう語る。「思想が被告の覚悟をもつということは、思想が敗北するイメージをもたねばならぬということだろう。思想というものは敗北する経路のイメージが、勝利する経路のイメージとともにつきつめられていなければ、現実の事実には拮抗できないんだよ。ただの平和業者や共存業者や革命業者が駄目なのは、その点だよ」。1960年の安保闘争時、「進歩的知識人」のヘゲモニーから落ちこぼれるリスクを覚悟で〈運動〉し、「敗北」を経ながらも「論争」を挑んできた吉本の強烈な自負が、ここからははっきりと読み取れる。

また、同じ原稿の中で、吉本は「日本の国家権力のもとで不在なたたかいが、ベトコンの中に存在するとおもうことがだめなんだ。ここに無いものは世界中どこにもないさ。ここにあるものだけしか、世界中にはないさ。（……）悲劇の責任は、権力と反権力の指導者の非自立性がまず、第一に負うべきなんだ。そこから世界思想が貫徹される道がひらけるのだよ」と記す。そして、当時『危険な思想家』を出版して話題を呼んでいた山田宗睦を指して、『新日本文学』のような「岡っ

引」が象徴する頹廢の延長線上にある「岡っ引の手先をつとめている下っ引」と罵倒し、「『戦後民主主義』なんてものは、理念としてはこの連中に象徴されるような薄っぺらなものに過ぎなかった」と切り捨てている。吉本によれば、戦後、大衆が生活原理として身につけた民主主義は無言のうち大衆の中に流れているものであり、それは『新日本文学』の同人に象徴されるような「進歩的知識人」とは何ら関係がない。大衆がもっている民主主義は思想化する際に否定すれば良いのであって、「生活化するばあいには、幻想としてその中へ入って行くべき対象」なのだという。

1960年代、高度成長によってもたらされた消費文化、大衆消費社会は、前衛との対決を標榜してきた吉本にとっては思想的には紛れもなく追い風であった。もはや前衛が唱える大衆の啓蒙などに何の影響力もなく、知識人こそが〈大衆〉の中に入っていかなければならない。そう唱える吉本の主張に、急速に〈大衆化〉が進む時代に生きる大学生、若者達はおおいに呼応した²⁰。明日の食糧の不安に怯える「近代的不幸」から、急激な社会環境の変化に戸惑い、マスプロ式の教育方針に不満を覚え、如何に生きるべきかの実存に苦悩する「現代的不幸」に戦後初めて直面した世代である当時の若者達にとって、社会の〈大衆化〉を肯定的に論じる吉本の主張は、自分達の不安を逆撫でするものではなく、むしろ優しく慰撫してくれるものだった。そしてそれは、周縁化された大衆芸術の極致であるロックミュージック、マンガなどのサブカルチャーが本格的に受容される土壌を準備することにつながっていくのである。

加藤秀俊は、1957（昭和32）年出版の『中間文化』において戦後の雑誌文化を論じ、1945年から1950年までのおよそ5年間を『世界』（1946年創刊。岩波書店）などの総合誌に象徴される「高級文化の時代」、つづく1950年から1955年頃までの約5年間を『平凡』（1945年創刊。平凡出版）などが象徴する「大衆文化の時代」、そして1955年から1960年頃までの5年間を『週刊新潮』（1955年創刊。この年から雑誌の「入り広」が「出し広」を上回る）等に象徴される週刊誌の「中間文化の時代」と定義付ける。これに沿って考えるなら、『試行』が創刊された1961年から60年代半ばの時代とは、「中間文化の時代」の後の「周縁文化の時代」とも名付けられる時期ではないだろうか。すなわち、高級文化と大衆文化が混交した中間文化がより徹底され、文化ヘゲモニーの中央にあったものが周縁によって追いやられた結果、周縁であったものが周縁でなくなり、全てが均質化、平準化していく時代である。

1960年、闘争の余韻と残り香の立ち込める中に生まれた『試行』は、色褪せていく闘争の記憶と入れ替わるようにせり上がってくる消費文化、大衆文化の時代に成長を遂げていった。そして、いよいよ本格的に始まる1970年代の大衆消費社会を、少なくとも思想的には否定する必要なく、迎え入れることになった。その陸続とした流れの中で登場したのが、今となっては不自然なほどに難解な言葉が並び、「場違い」な「論争」が交わされているかのように見える『NMM』や『ロックン・オン』のようなサブカルチャー誌だった。

1961年創刊の『試行』と1969年創刊の『NMM』は、少なくとも雑誌を取り巻く社会的な〈情況〉において考えれば、いくつかの符合が見出せる。一つには、全学連を中心に争われた日米安保闘争と全共闘を中心に争われた大学紛争という、闘争の争点はもちろん異なるものの、どちらも若者達を中心とした大規模な騒擾が「敗北」に終わった後に登場したメディアであるということである。中村とうようは吉本のように騒乱の渦中にあっただけではないが、雑誌創刊前から大阪労音の活動に深くコミットし、雑誌メディアを通じた〈運動〉を志向していたことは既に本文注でも指摘した通りである。また、吉本、中村のいずれとも、かたや思想や批評、詩の創作の場において、かたや海外のフォークやジャズ批評という当時は新進の音楽の場において、それぞれ必ずしも大きなメディアの場ではないにしても、確固とした評価、知名度をもっていた。マスを中心にいたわけではないある種のカリスマ的存在が、周縁の位置から自らの思想を表現する場を立ち上げる。その際

の中心的な場となったのが同人誌あるいはリトルマガジンという雑誌メディアの場であり、少なくとも1960年代から1970年代のはじめにかけては、社会に対して有効なインパクトを与えるオルタナティブな媒体として、『試行』や『NMM』のような雑誌メディアは機能していた。さらに、両誌とも創刊から数年後に、同様の壁に遭遇することも共通している。その壁とは〈大衆化〉に対するジレンマである。雑誌を安定的に継続させていくためには、それまで嫌悪してきたマスメディアや大衆の志向と折り合いをつけていかなければならない。高度成長の波の中で、『試行』は創刊時の同人を解消して吉本の単独編集に移行、さらには書籍の編集へと事業を拡張していった。その時、吉本の「大衆の原像」を肯定する思想は、『試行』の進路を矛盾なく補強するものであった。1970年代の『NMM』もまた、〈本質〉やルーツを問うことを忘れて商業的に拡大していくポピュラー音楽市場との軋轢を生じさせる幾つかの「論争」を仕掛けながら、何とかそれらとも折り合いを付けて、部数を拡張していった²¹。その過程において、欧米のロックミュージック以外のいわゆるワールドミュージックも雑誌の射程に入れ、開拓していったのは、ルーツに意識的な中村の音楽評論家としての矜持と言えよう。

急速に大衆化していく社会の中で、もはや〈本質〉を問うことは意味をもたなくなってしまう。それは、かつて周縁化されていた思想や文化が大衆化の果てに中央にせり出し、いつしか「中心なき周縁」とも呼ぶべき状況に社会全体が向かっていったからだ。そういったある種のいびつさのうちに、『試行』から『NMM』へと、つまり社会全体がサブカルチャー化へと向かう回路が開かれていったのではないだろうか。

6. 〈大衆化〉とイロニイ

1966（昭和41）年『文芸』4月号に掲載された「告知する歌」と題された詩において、吉本はこう綴る。

われわれは一九六〇年代の黄昏に佇ってこう告知する／
 〈いまや一切が終わったからほんとうにはじまる／
 いまやほんとうにはじまるから一切が終わった／
 見事に思想の死が思想によって語られるとき／
 われわれはただ／拒絶がしづかな思想の着地であることを思う／
 友よ われわれはビルディングのなかで土葬されてゆく／
 群衆の魂について関心をもち／ナイフとフォークでレストランのテーブルで演ぜられる／
 最後の洗練された魂の聖職者の晩餐について考察する／
 かれらの貌には紫色のさびしい翳がある〉²²

「一切が終わった」後に始められた〈本質〉をめぐる試み＝『試行』の始まりは、本当に「一切が終わった」ことの証しであった。いまやわれわれにとって可能なことは、「思想の死」を「思想によって語る」というイロニイでしかない。表面的には「群衆の魂」を肯定的に捉えながら、高度成長の活気とは裏腹に、貌に浮かぶのは「紫色のさびしい翳」である。もはや〈本質〉など存在しえないという諦めから〈本質〉を語り始めるしかないという吉本の振る舞いは、やがて1960年代の終わり、「現代的不幸」を抱えた多くの若者達的心情と共振し——吉本自身は当時の若者達による全共闘運動や市民運動に対しては終始批判的であったのだが——、サブカルチャーの場へと接続されていった。吉本が準備したイロニカルな大衆肯定の思想は、1960年代の終わり、本格化する大衆社会の到来において表層レベルで受容されたが、やがて吉本もまた、自らが準備した土壌をはるかに凌駕して拡張していく〈大衆化〉の波に飲み込まれていった。日本のサブカルチャーがもつ独特さの基底には、このような絶望的なイロニイの循環があったのではないか。

かつて、吉本のほぼ一世代下に当たる江藤淳は、作家村上龍の作品を厳しく批判する一方で田中康夫の作品を肯定的に評価したが²³、それはもはや引き戻しようがないほどに全てがサブカルチャー化していく日本の文化情況に村上が表現者として無自覚であったのに対し、田中が高度消費社会を「批評的」に描いているかのように見えたからだった。つまり、江藤の評価軸は、イロニイに対する表現者としての距離の取り方によっていた。それは、まるで猫の毛を逆撫でしようとするかのような、世界に対する江藤の絶望的な抵抗であった。一方、江藤とは違い、吉本は、少なくとも表面的には、猫の毛並みを自然に撫でるように「群衆の魂」を肯定的に慰撫していたかのように見えた。サブカルチャー化していく〈情況〉に生きる若者達もまた、そうした吉本を思想的に受け入れた。

しかし、実際には吉本の底にあるのは「一切が終わった」後の空虚な絶望だった。そのようなイロニイが、1960年代末の再びの「敗北」の後、すなわち1960年に続く1969年の再度の闘争の「終り」とともにサブカルチャーの場に接続され、その後の吉本もまた——当初のもくろみからすればおそらくは不本意ながら——、その完成に力を貸していった。だが周知のように、そういったイロニイの記憶は、1970年代以降の大衆消費社会の狂騒とともに時代の無意識の底に沈殿し、やがて忘れ去られていくのである。

註

- 『マス・イメージ論』、『ハイ・イメージ論』などの仕事以外にも、マガジンハウスの雑誌『an・an』1984年9月21日号でコム・デ・ギャルソンのスーツをまとって登場し、仕事場を紹介した吉本隆明を作家の埴谷雄高が批判、その後互いの言説に対する罵倒の応酬へと展開していった「コム・デ・ギャルソン論争」などはつとに有名である。
- 『NMM』や『プレイマップ』が創刊された1969年の前から、高石友也、岡林信康などを擁するURC（アングラ・レコード・クラブ）は、日本で最初のインディーズ系音楽レーベルとして既存のレコード流通システムに乗らない自主制作版の作品を発表していた。URCが音楽著作権管理会社として設立したアート音楽出版が販促ツールとして1969年1月に創刊した『うたうたうたフォーク・リポート』は当時の音楽を中心としたサブカルチャーの場を考察する上で非常に重要な媒体である。URCのミュージシャン達が発するメッセージ性の強い歌詞を含んだ作品群は当時の若者達の心を捉え、『NMM』も彼らを高く評価したが（『フォーク・リポート』には中村とうようの『NMM』創刊に向けての辞や、URCではつっぴいえんどを発掘し、『NMM』の主要メンバーでもある小倉エージなども寄稿していた。URC、『NMM』、そして大阪労音などの強い連続性を証明する顔ぶれである）、URC発の作品は主として言葉を大事にする「フォーク」であり、内田裕也らが目指していたビートを基調とする「ロック」とは異なるものだった。
- 山崎2016「雑誌メディアにおける〈情況〉と〈運動〉、〈他者性〉をめぐる問題——『ニューミュージック・マガジン』1970—1974年『群馬県立女子大学紀要第37号』65-79頁。
- 山崎2014『『ニューミュージック・マガジン』の時代』『群馬県立女子大学紀要第35号』161-175頁。
- 実際、その後の1975年、既に解散していたはつっぴいえんどの元メンバーである細野晴臣、松本隆らが、プロデューサーや作曲家、作詞家として芸能界の大手事務所の商業主義的な戦略に加担していく様子を、細野がアドバイザーとして関わっていたバンド、センチメンタル・シティ・ロマンスに対する批判として中村が『NMM』誌上で先鋭化させていったことは、「センチメンタル・シティ・ロマンス事件」として記憶されている。
- 篠原章のインタビューに対し、中村とうようは以下のように話す。少々長くなるが『NMM』および中村のルーツを示す重要な記述と思われるので、引用する。「ぼくはサウンドというよりビート派です。ロックのいちばん大事なところはビート一打に込めるその潔さだと思ってきているところが

あって、まず言葉でウケようとするのは気に入らなかった。日本語で歌うと言葉の部分によりかかって、音楽の真剣勝負にならないという、基本の部分と裕也とは共有していたんです。言葉がそんなに力を持つのであれば、文学でいいじゃないか、音楽が文学でないのは、サウンドとビートに言葉では表せないぐらいの真実のメッセージを込めることができるからだと思っている。バエズやディランが素晴らしいと思ったときは、歌詞に重きを置いて捉えてました。だからディランがエレキギターとロックバンドのバックで歌うようになった65年のニューポート・フォーク・フェスティバルの一件で、ぼくも迷った。ディランどうしたんだよと、理解できなかった。だけど、だんだんボブ・ディランの気持ちがわかるようになったとき、言葉よりもっと大事なものがビートとサウンドのなかにあることがわかってきて、NMMに行き着いた。そういう考え方がベースにあるから、どうしても日本語で歌う一派に対して警戒するというか、あんなものはロックじゃないやという裕也の主張に味方したくなっちゃったんです」(篠原 2005: 116-117)。

- 7 吉本隆明および『試行』からの影響という点では、『NMM』の競合誌『ロッキング・オン』(1972年創刊)の渋谷陽一の方がより顕著である。後年、1989年から1990年にかけて中村とうよの『NMM』と渋谷の『ロッキング・オン』との間でパンクバンドじゃがたら江の川アケミの発言をめぐって応酬された「議論」は、まさに感情的な「論争」であった。篠原も、中村も渋谷も吉本および『試行』の強い影響下にあり、特に渋谷の書く原稿の文体は吉本に酷似していたと指摘している。確かに、論争の相手を徹底的に攻め上げ、悪罵の限りを尽くすスタイルは中村、渋谷とも吉本譲りのものといえる。この一件からも示唆されることは、日本のロックジャーナリズムの影には吉本隆明の批評のスタイルがあったということであり、それが1990年代に至る時期にまで続いていたのではないということである。つまりは、篠原も言うように、日本のロックジャーナリズムは、戦後の文芸批評や文明批評をモデルとしながら、時代の変化とともにそのバリエーションとしてその存在意義を主張してきたということではないだろうか。本稿が『試行』を取り上げる要諦もまさにそこにある。また、矢崎泰久は自身が編集長を務めていた雑誌『話の特集』こそが『NMM』や『プレイマップ』の生みの親であると書くが、執筆陣の顔ぶれなどを見ると、確かに大衆文化に対するアプローチの仕方は、両誌に強い影響を与えたことは確かだと思われる。
- 8 村上一郎のエッセイによれば、それまでに3、4回しか会ったことのない吉本隆明から突然自宅に電話で同人誌をやらぬかと誘われたのは1961年8月のことだった。村上はや年の吉本のことを「自分より頭のしっかりした、思慮ぶかく、まっすぐに正しく猛く、大胆細心な人柄と思っていたから、共に手を携えて新同人誌をやらうという誘いを、たいへんうれしく聞いた」。雑誌の内容については「いたずらに啓蒙的すぎたり、時務情勢論ばかりが固まって載ってもいけないと思」うと心配する村上に対して、吉本も「いわれるとおりです。水準の高い、責任のはっきりした同人会を作りたいのです。どうですか?」と応じたという(村上 1972: 117-118)。村上には出版社に勤務して編集実務の経験があった。同人誌とはいえ、身近な知己や狭い思想的共通項のみを頼りにするのではなく、雑誌成功を目指す冷静な判断のもと、立ち上がった初期『試行』の姿がうかがわれる。
- 9 全学連の学生達に対する吉本の側からの思想的弁護の詳細については吉本『自立の思想的拠点』所収の「思想的弁護論——六・一五事件公判について」を参照。
- 10 「戦争が当たり前というような感情で育つて」という「戦中派」世代の属性分析については小熊英二『民主と愛国』第14章を参照。ちなみに中村とうよは1932年京都府生まれの「少国民世代」に属し、渋谷陽一は1951年東京生まれの「団塊の世代」後期に属する。
- 11 前述村上のエッセイによれば、在九州の谷川雁が「創刊のこぼし」を起草し、村上、吉本が内容を了解したとされている。
- 12 1960年代の『試行』の内容について、本稿では紙幅の都合上リスト掲載を省くが、筆者の集計では、1960年代(1961年9月20日発行の創刊号から1970年1月1日発行の第29号まで)に発行された『試行』掲載の原稿の本数は計271本。そのうち種別としては評論が196本、創作が74本、例外的に遺稿のメモを原稿として載せたものが1本である。同人の中心である吉本は毎月欠かさず原稿を執筆しているが、その他にも桶谷秀昭、森崎和江、三浦つとむ、磯田光一、内村剛介ほか、著名な作家、論者達の原稿が並ぶ。はじめのうちは連載も短期で終了するものが多かったが、号を追うごとに投稿者

の顔ぶれも定まり、連載も安定して長期化していく傾向が見られる。その結果、記事の本数や雑誌の頁総数も増加し、1970年1月1日発行の第29号では172頁、同年5月5日発行の第30号では196頁となり、雑誌の充実ぶりがうかがえる。これも紙幅の都合上、それぞれの原稿の詳細については本稿では言及しないが、当時の他の批評誌と比べても質、量ともに非常に高い水準にあったと言える。

- 13 以下引用について、雑誌初出から書籍化に向けて修正された表記、仮名遣いなどの箇所がある場合には、前後の文脈や理論上大きな変更でない限りは、原則として最終の書籍版を参照する。ここでの引用は角川文庫版『定本 言語にとって美とはなにか』より。
- 14 ただし、吉本によれば『言語にとって美とはなにか』は「基本的な批評の機軸を打ち立てるためにはやっぱり言語論からやらなければいけないという、そういう遡った発想から生まれた」ものであるが、試みたのは言語論ではなく表現論、批評論であったと述べている（吉本 2012：111-112）。
- 15 一般に出版界は好不況の影響を受けづらいと言われるが、1960年代のこの時期は物価の高騰、生産コストの上昇、それに伴う賃上げ要求などの諸要因が出版物の定価を押し上げ、売上高を増加させるというサイクルにあった。新刊の発行点数の伸びに対して実売金額の伸びがめざましく、それは本の定価の急激な上昇を示すものである。この時期の出版企画として特筆すべきは各社がこぞって全集物を出版し、それが軒並みヒットを飛ばしたことであろう。1960年、61年だけ見ても、「世界文学全集全50巻」（新潮社）、「世界ノンフィクション全集全36巻」（筑摩書房）、「昭和文学全集全30巻」（角川書店）、「少年少女学習百科大事典全21巻」（学習研究社）等々、全集、シリーズ物の企画が目白押しである。中産家庭の書架を飾る一種の教養アクセサリーとして出版物が機能し始めていたことの証左であり、「知識」や「教養」が急速に大衆化していったことを示す現象といえよう。
- 16 吉本の証言によれば、『試行』創刊当時、吉本はだいたい300部くらいの購読者が集まればなんとか雑誌としてやっていけるだろうと算盤をはじめていたという。実際にその目標はクリアし、雑誌運営は軌道に乗って行った。だが、前掲村上の日記エッセイによれば、「吉本は、はやる谷川を押え、部数も谷川のいう二千をナンセンスだといひ、村上のいう千五百も押え、自身は四百と辛く踏んだが、谷川雁の弟公彦のいた『読書新聞』でチョウチンをもったりして、前評判が高いので、初号はまず千部と決めたのが、たしか一九六一年十月であった。吉本和子（引用者註・吉本の妻）の独特の原価計算は、精密をきわめた」として、創刊号の発行部数の証言については食い違いがあり、判然としない。吉本は村上の細かい会計管理が性に合わなかったと言うが、一方の村上のエッセイからは、吉本の慎重で現実的な性格が伺われる。ただ、直接購読制を基本とし、書店への配本は限定するやり方をとっていたとはいえ、その後の『試行』の影響力の大きさなどを考えると、村上の「初号は千部」という証言の方が説得力を感じさせる。なお、同人誌の主催者と原稿投稿者とが同じように誌上に並び立つという編集方針は、紛れもなくその後の『ロッキング・オン』が踏襲したスタイルである。
- 17 2000年、島成郎の死に際し、吉本は谷川雁、元全学連委員長の武井昭夫とならんで、島を「将（指導者）たる器」をもった優れたオルガナイザーと称して、次のような言葉を残している。「島さんをはじめ『ブント』の人たちの心意気に、わたしも心のなかで呼応しようと思ったのだ。文字通り現場にくっついていただけで、闘争に何の寄与もしなかった。／島さんの主導する全学連主流派の人たちは、孤立と孤独のうちに、世界に先駆けて独立左翼（ソ連派でも中共派でもない）の闘争を押し進めた。それが60年安保闘争の全学連主流派の戦いの世界的意味だと、わたしは思っている。闘争は敗北と言ってよく、ブントをはじめ主流となった諸派は解体の危機を体験した。しかし、独立左翼の戦いが成り立ちうることを世界に先駆けて明示した。この意義の深さは、無化されることはない」（島成郎記念文集刊行会・編 2002：101-102）。
- 18 佐野『唐牛伝』164頁のインタビューより。草間については吉本へのインタビューでも言及されているが、佐野の島博子（島成郎の妻）への取材では姓名まで記されている。
- 19 上記注の通り、吉本の記憶によれば、当初吉本達は『試行』の採算分岐点を購読者300人と見込んでいた。「僕らは『どうせ、買う奴はいないんだから、赤字赤字と重なって、大体一年でアウトということになったら、また考えよう』と思っていたら、存外うまくいって、読者が増えていったんです。僕らは直接読者が300人になったら、絶対にやっていけるという目算を立てたんですけども、300人に近くなったんです。それで『これはいける』となったんですね。帳簿上では黒字になって、

それで『面倒臭いから、草間さんにお金を返しちゃう』ということになったんです」(吉本他 2000:14-15)。

- 20 慶大闘争に始まる大学学費闘争、大学紛争が本格化するのは1965年のことである。
- 21 前掲山崎「雑誌メディアにおける〈情況〉と〈運動〉、〈他者性〉をめぐる問題」の中村とうようと内田裕也の往復書簡等を参照。
- 22 この吉本の詩における「いまや一切が終わったからほんとうにはじまる／いまやほんとうにはじまるから一切が終わった」というトートロジックな表現は、およそ四半世紀のちの1988年、西武百貨店の広告で糸井重里が書いた「ほしいものはいつでも／あるんだけどない／ほしいものはいつでも／ないんだけどある／ほんとうにほしいものがあると／それだけでうれしい／それだけはほしいとおもう／ほしいものが、ほしいわ。」という有名なコピーを想起させる。糸井は吉本への傾倒を隠さないが、1980年代以降の日本の大衆消費社会を牽引した糸井にもたらされた吉本のイロニイの影響を感じずにはいられないコピーと言える。
- 23 前掲山崎『『ニューミュージック・マガジン』の時代』参照。

参考文献

- 石田英敬 2003 『記号の知／メディアの知——日常生活批判のためのレッスン』東京大学出版会。
- 大塚英志 2007 『サブカルチャー文学論』朝日文庫。
- 小熊英二 2002 『〈民主〉と〈愛国〉——戦後日本のナショナリズムと公共性』新曜社。
- 鹿島 茂 2009 『吉本隆明1968』平凡社新書。
- 加藤秀俊 1957 『中間文化』平凡社。
- 佐野真一 2016 『唐牛伝——敗者の戦後漂流』小学館。
- 篠原 章 2005 『日本ロック雑誌クロニクル』太田出版。
- 島成郎記念文集刊行会 2002 『島成郎と60年安保の時代1 プント書記長 島成郎を読む』情況出版。
- 出版ニュース社編 2002 『出版データブック 改訂版 1945→2000』出版ニュース社。
- 絳 秀実 2008 『吉本隆明の時代』作品社。
- 橋川文三 1998 『日本浪漫派批判序説』講談社文芸文庫。
- 増田 聡 2005 『その音楽の〈作者〉とは誰か——リミックス・産業・著作権』みすず書房。
- 2006 『聴衆をつくる——音楽批評の解体文法』青土社。
- 松本健一 1997 『谷川雁 革命伝説——一度きりの夢』河出書房新社。
- 松本輝夫 2014 『谷川雁——永久工作者の言霊』平凡社新書。
- 村上一郎 1972 『『試行』創世記における吉本隆明像』『現代詩手帖』1972年8月号、思潮社。
- 村上一郎著／竹内洋解説 2013 『岩波茂雄と出版文化——近代日本の教養主義』講談社学術文庫。
- 矢崎泰久 2005 『話の特集』と仲間たち』新潮社。
- 吉本隆明 1966 『自立の思想的拠点』徳間書店。
- 2001 『定本 言語にとって美とはなにか I』角川ソフィア文庫。
- 2001 『定本 言語にとって美とはなにか II』角川ソフィア文庫。
- 2011 『定本 情況への発言』洋泉社。
- 2012 『吉本隆明が最後に遺した三十万字 上巻「吉本隆明、自著を語る」』ロッキング・オン。
- 吉本隆明研究会＝編 2000 『吉本隆明が語る戦後55年①——60年安保闘争と『試行』創刊前後』三交社。
- 渡辺和靖 2013 『闘う吉本隆明——六〇年安保から七〇年安保へ』べりかん社。